

プロテスタントの挑戦

著者	乗 浩子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	14
号	4
ページ	2-11
発行年	1997-12-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006272

プロテスタントの挑戦

乗 浩 子

はじめに

カトリックの牙城ラテンアメリカでは、1970年代、80年代に解放の神学などカトリックの革新的な動向が関心を集めた。しかしその陰でプロテスタントが急増し、90年代初頭にプロテスタントはラテンアメリカ人口の10%に達した。カトリックでは名目的信者が多く、アクティブな信者が15%程度にすぎないといわれる現状からみると、この増加ぶりは革命的である。60～85年と同じ成長率を遂げたとすると、次の25年の2010年にはブラジルで総人口の57%、グアテマラでは127%がプロテスタントで占められるという予測もある*1。16世紀にスペイン人が先住民をカトリックに改宗させたそのテンポを想起させる増え方である。

1990年にラテンアメリカのプロテスタンティズムを包括的に扱った2冊の本が出版されて注目を惹いた。まず英国の宗教社会学者D・マーティンの『火のことば——ラテンアメリカにおけるプロテスタントの爆発——』は、ラテンアメリカにおけるプロテスタントの増大がマックス・ウェーバーの分析のように信者に経済的上昇をもたらすだけでなく、アングロアメリカをモデルにラテンアメリカを変革する可能性を示唆している。第2の書は、米国の人類学者D・ストールの『ラテン

アメリカはプロテスタントになるか？——福音派成長の政治学——』で、米国の明確な政治的意図のもとに保守的布教団によってラテンアメリカのプロテスタント化が図られたこと、しかしこれがリオグランデの南で土着化し、広範な宗教改革の一翼を担いつつあることが論じられている。両者とも視点、分析の手法など異なるが、この30年間にプロテスタントが急成長した社会的インパクトを与えているという認識では共通している*2。

- *1 Stoll, David, *Is Latin America Turning Protestant? The Politics of Evangelical Growth*, Berkeley, University of California Press, 1990, p.9.
- *2 Martin, David, *Tongues of Fire: The Explosion of Protestantism in Latin America*, Oxford, Blackwell, 1990; Stoll, *op. cit.*..

1 歴史と現状

植民地時代の16世紀に、カリブ海地域のイギリス植民地を除くと、プロテスタント植民地建設の試み（ベネズエラのウエルザー・ドイツ植民地、リオデジャネイロとフロリダのユグノー植民地など）は全て挫折した。16～17世紀にかけて、イギリス人商人・海賊およびエラスムス派スペイン人など数十名が宗教裁判所で“ルター派の異端”“謀反者”との宣告を受けた。こうしてカトリック植民地の秩

序は維持されたのである。独立後、保守党と自由党の政治抗争時代にプロテスタントへの門戸が開かれた。ヨーロッパから到来したプロテスタント移民は、自由党政権から教会設立の許可を受けた。カトリシズムと保守主義の結びつきを憂慮するリベラルは、ラテンアメリカの近代化を促進するものとしてプロテスタンティズムを歓迎したからである*3。

19世紀後半からラテンアメリカに対するプロテスタントの布教が本格化した。まず第一の波として、ヨーロッパのプロテスタント移民の大きな移住地が南米南部の各地に設けられ、布教組織が大規模な布教団を派遣し始める。バプティスト派、メソジスト派、プレスビテリアン派などの主流派（歴史的諸派）である。第二の波は19世紀末から20世紀にかけて、米国からの伝道を中心とする。西方と南方への発展は米国が神から与えられた「明白な運命」であるという当時の風潮を背景に、米国の布教団はリベラル・デモクラシーを国境の南に伝えるという使命感を抱いた。中心になったのは福音派であり、米国の潤沢な資金と人材の投入により、地理的にも近い中米諸国で多くの信者を獲得した。

ちなみに米国において福音派 (evangelical) は神学的保守派であるが、ラテンアメリカでは福音派 (evangélico) は非カトリックのクリスチャンの総称であり、歴史的諸派およびいわゆる福音派やペンテコステ派のみならず、モルモン教徒やエホバの証人なども含む広義の用語 (umbrella term) である*4。布教の第三の波は同様に米国から1930年代以降伝えられたペンテコステ派である。60年代以降の政治・社会変動を背景に、急速に増加して注目されている。

次にプロテスタント総数の増加ぶりを見る。統計によって数値に開きがあるが、ここに掲げた表

(1990年)によると、信者の絶対数の多い順はブラジル、メキシコ、グアテマラ……となる。人口比で高いのは中米(グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア)および南米のチリとブラジルであり、低いのはエクアドルなどアンデス地域である。

中米で信者の増加が著しいのは米国と距離的に近く、積極的に布教が行なわれているからである。プエルトリコやジャマイカでプロテスタントが多いのは、米国の属領的地位や旧英領であることによる。メキシコでは絶対数は多いものの人口比で

ラテンアメリカにおけるプロテスタント (1990年)

国	全人口 (100万人)	プロテスタ ント人口* (人)	プロテスタ ント (%)
アルゼンチン	34	1,360,000	4
ボリビア	7	525,000	7.5
ブラジル	151	19,630,000	13
コロンビア	30	240,000	8
コスタリカ	3.1	275,000	8.9
キューバ	10.6	265,000	2.5
チリ	12	216,000	18
エクアドル	10.8	32,400	3
エルサルバドル	5.5	1,155,000	21
グアテマラ	9.5	3,325,000	35
ハイチ	5.7	28,000	0.5
ホンジュラス	4.5	255,000	5
メキシコ	85	4,675,000	5.5
ニカラグア	4	800,000	20
パナマ	2.4	360,000	15
パラグアイ	4.4	308,000	7
ペルー	21	1,680,000	8
プエルトリコ	3.7	555,000	15
ドミニカ共和国	6.5	305,700	4.7
ウルグアイ	3	45,000	1.5
ベネズエラ	18	1,440,000	7.8

(出所) Bonino, José Miguez, "Protestant Churches in Latin America since 1930," in Leslie Bethell ed., *The Cambridge History of Latin America*, Vol. VI, Cambridge, Cambridge University Press, 1994, p.604.

(注) *1991年10月にプエノスアイレスで開催された Fraternidad Teológica Evangélica Latinoamericana の会議に出席した各国代表によって提出された推定値。

低い——米国に近いにもかかわらず、あるいは近い故に——。理由の一つは、プロテスタントに直接向かうエネルギーのもう一つのはけ口として、リオグランデ河を容易に越えて米国に移住できるからであり、もう一つの理由は民族主義的な反米感情であろう。アルゼンチンも信者数が多いが人口比では低い。ウルグアイは絶対数、人口比とも少ない。両国ともに世俗化が進んでいることが原因と見られる。ラテンアメリカのプロテスタント人口の半分を擁するブラジルでは、合理的で新鮮なイデオロギーとしてプロテスタントが受容され、キリスト教基礎共同体やウンバンダ(アフリカの習合宗教)と競いつつ定着した。

ラテンアメリカにおけるプロテスタントの総数は1900年に93万人にすぎなかったが、30年に250万人、70年に1273万人、85年に2192万人、90年に3750万人*5、へと急増しており、ラテンアメリカの高い出生率を考慮してもなお急速な伸びを示している。

各教派の特徴についてみると、まず、幼児洗礼を認めず信仰者のバプティスマのみを認めるバプティスト派、J・ウエスレーの神学と密接に結び付いたメソジスト派、長老の役割を重視するプレスビテリアン(長老派)など宗教改革時代のヨーロッパに起源を持ち、米国で発展したのが主流派である。彼らの中にはカトリックの伝統的社会に抵抗して、ブラジルの共和革命、キューバ独立運動、メキシコ革命などの民主化運動に参画する者も出た。しかし現在のラテンアメリカでその勢力は相対的に減少し、もはや主流でなくなっている。

第二の福音派はギリシャ語の euangelion(良い知らせ)に由来し、聖書の絶対的権威を信条とする。キリストとの個人的結び付きによる救済を重視し、全ての国と人々にこの救済のメッセージを伝えるべきと考える。米国において福音派は新宗教右翼として政治的に大きな影響力を持ち、ラテンア

リカへの働きかけも積極的に行なっている。初期のエバンヘリコはほとんどが農村と都市の労働者と中間層であった。グアテマラとブラジルでは、大統領の招聘に応じて米国の宣教師が伝道を開始した。その目的はカトリックを弱体化させ、欧米流の知的・物的近代化を進めることにあったといわれる*6。

第三のペンテコステ派はキリスト教の革新運動であり、キリスト復活後の50日目の五旬節に起きた精霊降臨祭を指す。精霊によるバプティスマを受けた者は、予言能力や異言(グロッソラリア)を語る力などの精霊の賜(カリスマ)を持つことができるといふ。狂信的な性格が強く、教義よりも神との個人的交わりを重視する。この運動は20世紀初頭に米国の中西部で生まれ、現在ラテンアメリカのみならず第三世界において、下層階級を中心に最も伸張している教派である。ペンテコステ派は1960年に全プロテスタントの3分の1を占め、80年代に4分の3を占めるに至った*7。信者はペルトリコ、チリ、ブラジルで特に多い。また60年代後半以降、カトリックの中でペンテコスタリズムを採用する人々がでてきており、これはカリスマ的刷新運動と呼ばれている。

福音派の一部とペンテコステ派は一般にファンダメンタリストと称される。ファンダメンタリストとは、J・バーの定義によると、聖書の無謬性を信じ、近代科学に強い反感を持ち、自分たちの宗教的見解に同調しない者は真のキリスト者ではないと確信している人々である*8。彼らは教派や教会の相違を超えてキリスト教徒の再一致をはかるエキュメニズムや多様性を認めない。こうしたファンダメンタルな人々を、プロテスタントの主流派やカトリック教徒はセクト(sect, スペイン語でsecta)と呼ぶ。世俗主義に挑戦する原点回帰主義—原理主義の動きは、米国やラテンアメリカのみ

ならず、1970年代以降のイスラム圏を含め、世界的に見られる現象である。

ファンダメンタルなプロテスタンティズムがラテンアメリカで急速に拡大した理由は幾つか考えられる。まず第一に、1930年代以降の都市化、工業化、世俗化がもたらした社会変動が、旧来の社会的宗教的絆を崩壊させ、人々は新しい避難所あるいは慰めを迫力あるファンダメンタリズムに求めたこと*9。第二にカトリック教会が弱体化しているこうした要求に応えられず、しかも世俗化があまり進行していない地域で、新しい福音に人々が惹きつけられた。カトリック教会が強力なコロンビアやエクアドルでプロテスタントの比率が低く、逆にグアテマラなどで福音派が増えている理由である。第三に60年代以降主流派プロテスタントとカトリックの間で進行したエキュメニズムの雰囲気、名目的カトリックからの改宗を促した。第四に次に述べるようにプロテスタントの方が人々（特に下層階級）を惹きつける魅力を持っているからである。

* 3 Bonino, José Miguez, "The Protestant Churches in Latin America since 1930," in Leslie Bethell ed., *The Cambridge History of Latin America*, Vol. VI, Cambridge, Cambridge University Press, 1994, pp.583-586; Pazos, Antón, *La iglesia en la América del IV centenario*, Madrid, Editorial Mapfre, 1992, pp.172-178.

* 4 Stoll, *op. cit.*, p.4.

* 5 デビッド・バレット編『世界キリスト教百科事典』教文館 1986年 43ページ。1990年の数字は前掲表より算出。

* 6 Cook, Guillermo, "Protestant Presence and Social Change in Latin America: Contrasting Visions," in Daniel R. Miller ed., *Coming of Age: Protestantism in Contemporary Latin America*, Maryland, University Press of

America, 1994, p.120.

* 7 Stoll, *op. cit.*, p.101; 高橋正明「貧者の宗教——ラテンアメリカ下層民とペンテコステ派——」(『アジア経済』第36巻第9号 1995年9月) 49~51ページ。

* 8 井上順孝「はじめに」(井上順孝・大塚和夫編『ファンダメンタリズムとは何か——世俗主義への挑戦』新曜社 1994年) 8~9ページ。

* 9 Lernoux, Penny, *People of God: The Struggle for World Catholicism*, New York, Viking, 1989, p.155; Stoll, David, "Introduction: Rethinking Protestantism in Latin America," in Virginia Garrard-Burnett and David Stoll eds., *Rethinking Protestantism in Latin America*, Philadelphia, Temple University Press, 1993, pp.6-7.

2 ラテンアメリカ・プロテスタンティズムの倫理

プロテスタンティズムの研究では個人経済に関わるものが多い。ウエーバー以来プロテスタンティズムは資本主義の精神と結び付けて考えられ*10、現世的修道士倫理を優先したカトリック・ラテンアメリカにおいて、プロテスタント人口の増加は合理的資本主義の発展を促す要因と見做されたからである。確かに主流派プロテスタントが中心であった時代にプロテスタントの勤勉・節約という合理的禁欲の倫理は、信者の企業家意識を刺激し、一代で社会的出世階段を登った例が少ない。ラテンアメリカ・プロテスタンティズムに関する初期の研究であるデピネ (d'Epina) とウィレムス (Willems) による研究も同様の結論を出している。前者はチリの都市における移民の改宗者に焦点を当て、後者はブラジルの農村の改宗者を中心にした研究の中で、貧民層または中産階級出身の改宗者が厳しい労働倫理によってより高い

経済的地位を獲得したと述べている*11。

しかし1980年代の累積債務問題に伴う経済危機はプロテスタントの上昇モデルを修正した。例えば内戦で資本が逃避したエルサルバドルでは、プロテスタントは依然貧しく、信仰が経済的相違をもたらすものとはならなかった。ボリビアの場合、事情は少し異なる。非合法のインフォーマル・セクター（麻薬密輸）が国家経済に貢献しているという特殊事情もあって、首都ラパスに移住したアイマラ系住民の福音派の間で、マージナルな物質的改善が見られたという*12。プロテスタントへの改宗者は勤勉・節約に加えて「古い罪深い道」=悪徳（飲酒、ギャンブル、女を追いかけること）を悔い改め、映画、観劇、ダンスなどの娯楽を控えなければならない。これは禁欲的なモラルを育てるとともに、わずかな所得をこうした「悪徳」に浪費しなくなるので、家庭経済を改善し、家庭を安定させる。貧困と家庭崩壊に悩むマージナルな階層にとって、これは大きな魅力である。しかし貧しい階層が多いプロテスタントが、企業家精神を発揮できる機会は乏しい。ウェーバーが描くような禁欲的なモラルのもとでひたすら利潤追求を行ない、近代的合理的資本主義形成に貢献する姿を求めることは困難であろう。

むしろ、先のボリビアのアイマラの人々の例にみるように、ラテンアメリカのプロテスタントにとって、プロテスタンティズムは経済的生き残りのための戦略である。改宗によって、病人、失業者、アルコール中毒者、貧困者はペンテコステ派や福音派などプロテスタントの共同体から手厚い保護を得る。また教会は、出稼ぎの青年たちに軽食と憩いの場を提供するサロンでもある。「避難所」としてのプロテスタント組織には、しばしば外国から潤沢な資金が送られてくる。教会は宗教組織でありながら、信徒たちの物質的・心理的安全を保

障する互助組織でもある。

プロテスタントでは女性の役割が大きい。マチスモが根強いラテンアメリカでは、男性の異性関係に寛容であるが、教会は男性に貞節と家庭を守るべきことを説く。改宗によってマチスモが抑制され、家庭のダイナミズムが再構築される。また家族や隣人を改宗させ、信者としてリクルートするのも女性であり、信者の中で女性が占める数も多い。ペンテコステ派では女性差別、人種差別、貧困、暴力などのない「神の国」を地上に実現することを目指す*13。ペンテコステ派は混沌とした世界において個人に心理的聖域としての安らぎの場を提供するとともに、来世における個人の場所を確保し、この世の苦しみに新たな価値を与える。ペンテコステ教会は個人的救済に焦点を合わせており、宗教的権威は第一義的にカリスマ的であるために分派的になりやすく、教会の数が増殖する。特に都会ではカトリック教会よりもプロテスタントの教会の数が多し。

プロテスタントではカトリックの場合と異なり、神と個人の関係を重視するので、その間に立つ第三者としての聖職者の重要性が少ない。カトリック教会のように教皇を頂点とするピラミッド型の位階的聖職者の官僚組織を持たない。プロテスタントの中でも主流派の牧師は中間層出身の神学校卒業生で構成されているが、ペンテコステ派の場合、改宗した信徒が街頭で伝道活動を行ない、その中で精霊の賜物を得た証がある者が牧師となる*14。貧しい出自の説教者の存在は貧しい人々に夢を与え、上昇志向を実現させる。

ところでプロテスタントへの改宗は悪徳や娯楽のみならず、これまで慣れ親しんできたカトリック的価値観、習慣、伝統との決別・断絶を意味する。カトリック暦で行なわれる典礼・祭礼に加えて、コンパドラスゴ（精神的儀礼的親子関係）や村

落での共同作業への参加を拒否する。カトリック文化税ともいうべき値の張る祭りに参加しないので、プロテスタントの先住民の方がカトリックに比して多少富んでいるとの調査結果もある。そうした結果村の掟は破綻し、カルゴ・システム（村の自治的な行政・祭祀組織）が危機に瀕し、基本的社会単位としての伝統的コミュニティの崩壊も免れない*15。

カトリシズムは他の文化に寛容で、先スペイン期文化と土着信仰の存続を許し共存してきたが、原理主義的プロテスタンティズムの純粋性と排他性はその存続を許さない。改宗によるカトリシズムとの断絶は伝統的土着文化・宗教との断絶をも意味するわけである。改宗者は装いを改め、上品な中産階級の生活態度を身に付けようとする。ラテンアメリカの貧しい禁欲的プロテスタントにとって、プロテスタントになることは、中産階級のライフスタイルに達することである。

普遍主義の立場から世俗世界への関与を使命とみなすカトリックに比べて、一般にプロテスタントは内面に沈潜し政治的にアクティブではない。しかしファンダメンタルなプロテスタントは教義面で保守的で、権威の受身的受容を強調するので、保守的な政治傾向があり、右翼的政治勢力と結び付きやすい。たとえばチリのピノチェット政権は軍政に批判的なカトリック教会の勢力を殺ぐため、ペンテコステ派を重用した。ブラジルのペンテコステ派の多くは1964年の軍事クーデターを支持し、政治開放期にその票は中道右派の政党に流れた。もっとも、進歩的なペンテコステ派が存在しないわけではなく、ブラジルの「ブラジル・パラ・クリスト」教会がその例に挙げられるが、むしろ例外的である。ペルーでは90年の選挙でプロテスタントの支持を得てフジモリが大統領に当選し、18人のプロテスタント議員が誕生した。ブラジルで

は民政移管後の制憲議会に相当数のプロテスタントが選出され、91年にはグアテマラでプロテスタントが大統領に選出されるなど、セクトの政治参加は無視できないものとなっている*16。

*10 M・ウエーバー（梶山力ほか訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上・下 岩波書店 1962年。

*11 d'Epinay, Christian Lalive, *The Haven of the Masses*, London, Lutterworth Press, 1969; Willems, Emilio, *Followers of the New Faith*, Nashville, Vanderbilt University Press, 1967.

*12 Garrard-Burnett, Virginia, "Conclusion: Is This Latin America's Reformation?" in Garrard-Burnett and Stoll eds., *op. cit.*, p.203.

*13 藤田富雄「ラテンアメリカのプロテスタント——その歩みと展望——」（G・アンドラーデ・中牧弘允編『ラテンアメリカ 宗教と社会』新評論 1994年）63ページ。

*14 高橋 前掲論文 61ページ。

*15 加藤隆浩「カトリックからプロテスタントへ：中央アンデスの事例から」（日本ラテンアメリカ学会第15回定期大会報告要旨）1994年 4～5ページ；Garrard-Burnett, *op. cit.*, p.204; Martin, *op. cit.*, p.71.

*16 Lernoux, *op. cit.*, p.156; Stoll, *Is Latin America...*, p.316; Martin, *op. cit.*, p.67.

3 米国の影

米国から導入されたファンダメンタルなプロテスタンティズムはラテンアメリカで土着化し、下からの民衆運動となっているが、米国の宗教組織や米国政府によって操作されてきたことも事実である。ファンダメンタリズムの起源は米国にあり、進化論に反対した1920年代のファンダメンタリズムが政治的に控え目であったのに対して、80年代に再興したファンダメンタリズムは保守政治化し、

レーガン政権を積極的に支援した。これら新宗教右翼は世俗の人間中心主義を批判し、伝統的家庭を守り、米国至上主義を主張する*17。大集会場からテレビで説教を行ない、一部は国境の南にも活動の場を拡大した。

北米の福音派指導者にとって、プロテスタントイズムはラテンアメリカの貧困やキューバ革命による共産主義の脅威に対する精神的オルターナティブであった。ラテンアメリカに対する反共布教団の第一の波はキューバ革命(1959年)直後から起こるが、これは低強度のものであった。米国の歴代大統領の精神的支えであるビリー・グラハム牧師の福音組織の指令と援助の下に、ラテンアメリカ福音化会議が69年にコロンビアのボゴタで開催され、福音化10年計画が立てられる*18。第二の布教団の波はニカラグアでサンディニスタ革命が勝利し(79年)、米国でレーガンが大統領に選出された(80年11月)直後から始まり、ラテンアメリカを席卷していく。

米国政府はかねてからラテンアメリカのカトリック教会の動向に警戒的であった。1969年にニクソン大統領に提出された『ロックフェラー報告』は、カトリック教会の行動を米国の利益に反すると警告した。ついでレーガン大統領のシンクタンクであったサンタフェ委員会は、大統領選挙中から、米国の対外政策が解放の神学に対抗すべきことを提言していた。ラテンアメリカに対するプロテスタント布教団の活動は、カトリック勢力の弱体化を望む米国政府の支援を得て行なわれたのである。

米国のファンダメンタリストの中で特に活躍したのは、パット・ロバートソンやジミー・スワガートなどペンテコステ派の「テレビ説教師」たちである。彼らは「神はアメリカの宗教」であるとの立場から、米国のヘゲモニーへの挑戦は悪魔の

仕業であるとし、中米を救う特別の使命を表明した。そのテレビ番組はスペイン語に吹き替えられ、中米に向けて放送された。彼らはコントラ(ニカラグアの反政府ゲリラ)に洗礼を施して「キリスト教自由の戦士」と命名し、サンディニスタ政権の打倒を図った。

ロバートソンは自ら所有するキリスト教系テレビ局(CBN)で定期的に政府の中米政策を支持する番組を組んだ。エルサルバドルのシリーズでは左翼暴力のレポートが誇張され過ぎていると訴え、ホンジュラスのコントラ訓練キャンプを訪ねて、これを「神の計画」と称えた。視聴者からの寄付が多額に達したので、たとえば1985年にロバートソンの組織はグアテマラとエルサルバドルの政府に200万ドルの「人道」援助を行なっている*19。ちなみにロバートソンは88年の大統領選挙に出馬を表明し、共和党内でブッシュ大統領を抑えて第2位を占めた。

スワガートの組織は中米で教会を建設し、教会指導者を養成し、貧民地区に学校を建てて子供たちにミルクや衣料を提供した。彼は1987年にチリとエルサルバドルに招かれたが、チリでは「クーデターによって悪魔(左翼)を追放した」ピノチェット大統領を祝福し、「チリが自由の国であることを世界に語る」ことを約束する。88年にはニカラグアを訪れ、首都マナグアの革命広場で大集会を開催する。コントラを支援するこのテレビ説教師の集会を認めたサンディニスタ政権の意図は、信仰の自由——サンディニスタ政権が宗教的(プロテスタント)迫害を行なっていないこと——を示すことにあった*20。

米国の強い影響のもとで、プロテスタントが全人口の3分の1を占めるまで伸びたのは中米のグアテマラである。1880年代に宗教的自由を標榜するバリオス大統領の要請で、米国のプロテスタン

ト組織が宣教師を派遣して以来、布教が進められた。プロテスタント化に拍車がかかったのはその1世紀後、福音派の將軍エフライン・リオス・モント等若手将校が82年のクーデターで実権を掌握した後である。カトリックから「御言葉の教会」(Iglesia del Verbo)に改宗していたリオス・モント大統領は、教会の長老を下院議員に指名し、教会を政府の精神的アドバイザーとした。御言葉の教会はカリフォルニアを拠点とする福音派布教団グループ Gospel Outreach の分派で、他の米国のファンダメンタリストの教会同様、76年の地震以降、グアテマラで活動を開始していた。

グアテマラでは1960年代から土地改革を求める農民ゲリラとこれに対する右翼テロ組織と政府軍によるゲリラ掃討作戦が激化し、70年代には内戦となったが、ファンダメンタリスト大統領の登場によって掃討作戦はより徹底的かつ体系的となった。安全保障と開発政策を結び付けた戦術によって、数多くの先住民が土地を追われ、殺される。政府による人権侵害を批判するカトリック教会は弾圧され、多くの聖職者やカテキスト(世俗の宣教師)が殺害された。政府を批判した大統領の実弟 M・E・リオス・モント司教も亡命を強要される。高地の農村では政府の弾圧を恐れる農民が、村ごとプロテスタントに改宗する例も珍しくなかった。プロテスタント大統領の出現を歓迎した米国のファンダメンタリストは、グアテマラ政府に続々と布教団と資金と物資(食料・衣料・薬品・スペイン語の聖書など)を送り込んだ。これらの支援は貧しい人々に改宗を促すインセンティブになった。パット・ロバートソンはクーデター直後から独裁者との会見をCBNで放映し、コミュニズムから祖国を救うため苦闘する信心深い男と称え、グアテマラを「イエス・キリストの王国」になぞらえた。米国政府はカーター政権期以来グアテマラにおけ

る人権侵害を理由に軍事援助を停止していたが、CBNの放送は援助の再開を要求するホワイトハウスへの手紙の洪水を引起こした*21。

將軍は1983年8月の軍クーデターで権力を失ったが、その際の追放の理由に「狂信的で攻撃的な宗教グループによる」政教分離の原則の侵害が挙げられている。しかし彼の遺産は生き、改宗者は増え続け、91年には再び福音派の政治家ホルヘ・セラノが大統領に選出される。

*17 森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』講談社 1996年 178~220ページ。

*18 Bonino, *op. cit.*, p.598; Bastian, Jean-Pierre, *Historia del protestantismo en América Latina*, México, Editorial CUPSA, 1990, p.224.

*19 Lernoux, *op. cit.*, pp.156-157, 161; Stoll, *Is Latin America...*, pp.222-223, 249-253.

*20 Stoll, *op. cit.*, pp.152-154, 305-307; Lernoux, *op. cit.*, p.156.

*21 Lernoux, *op. cit.*, pp.157-159; Bastian, *op. cit.*, pp.250-251; Stoll, *op. cit.*, pp.180-217.

4 カトリック教会の対応

プロテスタントに対するカトリック教会の公の立場はエキュメニズムである。第二バチカン公会議(1962~65年)は「すべてのキリスト者の間の一致再建を促進することは、聖なる第二バチカン公会議の主な目的の一つである」と宣言し*22、プロテスタントやギリシャ正教との一致がカトリシズムの原理に適うものとした。カトリックもプロテスタントも進歩派はエキュメニズムに熱心であり、協力して事業を進めている。しかし過去数世紀にわたって互いを「悪魔」とのしり合ってきたカトリックとプロテスタントの関係を、一朝にして修復するのはかなり困難である。92年10月のサン

トドミンゴ会議(第4回ラテンアメリカ司教協議会総会)の開催に際し、教皇ヨハネ・パウロ2世は「われわれの共同体に分裂と不和を引起こす強欲な狼」とプロテスタントを非難し、司教たちに警戒を呼びかけた*23。(傍点筆者)

ラテンアメリカにおけるプロテスタントの挑戦は、カトリックの進歩派にとっても保守派にとっても脅威である。進歩派は、神との個人的関係を強調するプロテスタンティズムを、共同体主義的なカトリシズムと対照的なものと考えている。彼らはプロテスタントの伸長を北米右翼の陰謀によるものと見なしがちであり、ラテンアメリカの右翼独裁政権に肩入れするプロテスタント・グループを社会正義に反するとして批判する。一方保守派はセクトの侵略をラテンアメリカ文化への襲撃と見なす。伝統主義者にとって、ラテンアメリカであることはカトリックであることに他ならないからである。カトリック教会が貧しいため、米国の支援を受けたプロテスタント教会に太刀打ちできないとの認識も両派に共通している。

セクトの拡大をともに脅威と見なした進歩派と保守派も、処方箋では異なる。改宗者の多くは、進歩派が働きかけの対象としてきた貧しい人々であり、進歩派はキリスト教基礎共同体(CEB)こそ貧民地区のカトリック教会を強化できると期待する。CEBの参加民主主義的傾向を危険視する保守派は、教会の司牧事業の強化(教区と人員の増加)と伝統的秘蹟機能の拡大に資源の再配置を求める。1979年のプエブラ会議(第3回ラテンアメリカ司教協議会総会)においてカトリック指導部は初めて深刻な事態の分析を行ない、「教会が宗教の再活性化を行なわねば、真空はセクトに占領されるであろう」と警告する*24。

セクトの挑戦を憂慮するバチカンには1986年に自己批判的文書を発表した。この中で米国の政治的

経済的利害によってセクトが支えられているとの見解を示し、新しい教会が民衆の希望や要求を実現しつつあるとのプエブラ会議の評価を支持した。バチカンは処方箋では保守派の方針と同様、福音宣教の強化を主張しており、ヨハネ・パウロ2世は90年12月に発表した回勅『救い主の使命』で宣教活動の再活性化を呼びかけ、サントドミンゴ会議ではラテンアメリカの新福音化計画(Lumen 2000)を宣言する。その関心は規律と秩序と教義的純粹性の保持に向けられている。

カトリック教会のこうした新しい戦略によって教会の覚醒と活性化が実現し、改宗者を再びカトリックに引き戻す例も少なからず見られる。しかしこれは一部で起きている現象で、ラテンアメリカ全体ではカトリック教会は弱体化の方向にある。カトリック教会の活性化を抑制する要因の第一は、資源の乏しさ、特に聖職者の不足である。セミナリオの学生がわずかに増えても、需要にははるかに追いつかない。またカトリックの僧になるためには神学校での長期間の教育が要求される上に、結婚も許されないので、改宗して直ちに伝道できる上、家庭生活も営めるペンテコステ派の牧師の数の急増との差は開くばかりである。

活性化を妨げる第二の要因は外国的ファクター、つまり外国人僧が多いことが教会への親近感を弱めていることである。聖職者不足を補うためヨーロッパや米国生まれの僧が導入されており、ベネズエラ、ペルー、ニカラグアなどでその数は過半数を超える*25。第一と第二の要因がカトリック教会における人的弾力性の欠如を示すものとするれば、第三の要因は組織的教義的非弾力性である。カトリック教会は伝統的に基本的地方単位としての教区の理念を守り、地図を教区の境界線で区分してきたので、容易にその修正や増加はできない。しかしプロテスタントでは必要に応じて弾力的に教

会を増やし、人材を供給できるので有利である。また教義面でも社会的には離婚や妊娠中絶を認めないなど、弾力性に欠ける。

進歩派にとって教会再生の希望の星であるキリスト教基礎共同体も、過大に評価されてきた感がある。貧困地域においてCEBとペンテコステ派は競合関係にあるが、貧しい人々の中では基礎共同体よりもペンテコステ派の方に惹かれる場合が多い。例えば基礎共同体は聖書やさまざまな資料の講読と書かれた言葉の分析に力を入れるので、非識字者が多い下層民の中には疎外感が生まれやすい。しかしペンテコステ派では祈りによる精霊との交わりの方が重視されるので、識字力はそれほど重要ではない。またペンテコステ派の集会では女性が家庭内の悩みを語り合い支え合って、教会は避難所としての役割を果たしているが、基礎共同体では家庭内の問題は次元が低いと見なされ、社会意識の高揚が求められる。その結果共同体のメンバーが社会的紛争に巻き込まれることにもなる^{*26}。

カトリック教会がプロテスタントの挑戦に積極的かつ有効に対応し得るか否かを考える時、カトリック教会の権威主義的構造の問題に逢着する^{*27}。ローマ帝国時代に遡る世界最古の官僚組織であるローマカトリック教会が、新しい時代の変化にどれだけ対応できるだろうか。分権的組織を通じて人々の要望を汲み上げてきたプロテスタント教会と対照的に、カトリック教会は中央集権的位階組織を特徴とする。しかも社会意識の進展は、社会的紛争を処理し社会階級間の仲介を務める教会の伝統的機能を低下させた。規律と秩序と教義的純粋性によって、どこまでラテンアメリカの人々の心の拠り所となり得るか、問題である。

*22 南山大学監修『第2パチカン公会議公文書全集』中央出版社 1986年 113ページ。

- *23 Stewart-Gambino, Hannah, "Church and State in Latin America," in *Current History*, 93-581, March 1994, p.132.
- *24 Lernoux, *op.cit.*, p.154; Stewart-Gambino, Hannah, "Introduction: New Game, New Rule," in Edward L. Cleary and Hannah Stewart-Gambino eds., *Conflict and Competition: The Latin American Church in a Changing Environment*, Colorado, Lynne Rienner Publishers, 1992, pp.14-15; Cook, *op.cit.*, p.122.
- *25 Cleary, Edward L., "Conclusion: Politics and Religion-Crisis, Constraints, and Restructuring" in Cleary and Stewart-Gambino eds., *op.cit.*, p.217.
- *26 Cook, *op.cit.*, pp.94, 123-124; 高橋 前掲論文 64~66ページ。
- *27 Stoll, "Introduction....," pp.4-6.

む す び

近代欧米の市民社会を内面から支え、資本主義の発展を促したプロテスタンティズムは、20世紀末のラテンアメリカにおいて下層民衆の宗教として、周辺資本主義の周縁部を支える役割を果たしている。

プロテスタントの爆発的増加によって、カトリックによる宗教的独占は破られ、ラテンアメリカの人々が自由に宗教を選択する時代を迎えた。宗教を巡る独占から自由競争への移行は、社会的には近代化の指標の一つとなるであろうが、ファンダメンタリズムの拡大がラテンアメリカ社会に何をもたらすか、検討を要すると思われる。

(よつや・ひろこ/帝京大学教授)